

く会議室の一角に設けられた「保科五無齋コーナー」に、先生の「鉱物標本」がほぼ完璧な状態で保存されていることを紹介していました。



と述べているように、そのいずれも教育に関する活動でした。保科百助先生の多岐にわたる奔放な実践は、常に教育の範囲を超えず、その生涯を「神聖と信じた教育」に関連する仕事に捧げたのです。

保科百助先生は、「無垢なる教育的情熱」に基づいた、先見性に富む数々の教育論を残しました。その多くは、現代の学校教育においても通ずる達見であり、特に、次のような教育観は、「立科教育」においても、大いに参考にすべきではないでしょうか。

＊ 「学校教育と世人の過信」

学校教育は、教育の一部分であって、教育の全体ではない。ところが、世人の多くは、教育は学校でするもののように心得、自分は少しもその責任を分担せず、教育の全体をすべて学校に委ね、その責任の全部を学校に負わせようとする傾向がある。これは世人の過信である。学校教育に重荷を負わせるものである。

＊ 「世人はことごとく教育者なり」

学校生活は、日曜やその他の休日を含算すれば、覚醒時のほとんど四分の一に過ぎず、いかに学校教育に威力があっても、学校教育は校門外にまで感化を及ぼし得るものではない。社会共同の教育力

をもって学校教育に援助を与えなければ、学校教育はほとんど何の効果も挙げられないであろう。教育は社会全体の担任である。世人はことごとくある意味の教育者である。この自覚がなければ、教育は無効とある。

＊ 「生徒の叱り方」

小学校や中学校の先生方には、授業中、生徒が話していると、「なぜ騒いでいるのだ？」と叱る人がいる。しかし、これほど危険な質問は世界にない。少し生意気な生徒から、「先生のご教授はいかに不調法である。学問上の素養も浅薄で、論理も明晰ではない。加えて、音声が高く、子守歌のように眠気を催す。そのためやむを得ず、防睡剤として級友と話をしていたのだ。高い授業料を払いながら、毎日毎日催睡剤に等しいご講釈、何とも恐縮の至りである。」と言われたら、その教師は烈士のように怒り、一時生徒を鎮圧するだろう。だが、子弟の心服を得ることは到底できない。教師は、自分の担当学科については、該博で、明瞭な知識を包蔵して、親切に教鞭をとることはもちろんであるが、修辞学や雄弁法の一冊くらいは読まなければならない。

＊ このような教育論を、保科百助先生は、忠君愛国の精神を強調する教育勸語に

則った、日清・日露戦争前後の教育状況下で唱えたのです。その信念と教育の本質を見抜く慧眼にただただ敬服すると同時に、「学校教育に対する過信」を戒め、「社会共同の教育力」を基盤とする「立科教育」であってほしいと強く思いました。

〈参考図書〉

- 「五無齋保科百助全集」 佐久教育会編集
- 「詩伝 保科五無齋」 三石勝五郎著
- 「保科五無齋石の狩人」 井出孫六著
- 「野人教育家 保科百助の生涯 五無齋と信州教育」 平沢信康著
- 「私を変えた源流」 中山英一著
- 「にぎりぎん式教育論上・下」 須藤實著

相談時間等

月・水・金曜日

- 立科小学校／午前9時～午前11時30分
電話 56-3131 (呼)・有線2190 (呼)
- 立科中学校／午後2時～午後5時
電話 56-1076 (呼)・有線2251 (呼)
- 立科町児童館／
午前 11時40分～午後1時30分
電話 56-0303 (直通)
有線 8889 (直通)

※予約をされる方は児童館または小・中学校の教頭先生へご連絡をお願いします。